

忘れること覚えていること～仏の顔も三度

以下は、月刊「ナム」に連載していた「現代と仏教」という拙稿の一部です。

「忘れること覚えていること～仏の顔も三度」(2015年7月号連載、第46話)

●「四月八日」を覚えてますか？

テレビ朝日の夜の人気番組だった『タモリ倶楽部』は、「お釈迦さまおめでと～日本人ならクリスマスより花まつりを祝おう」という題で放送をしました。番組では、渋谷の若者、四八人に「四月八日は何の日？」と尋ねたところ、その認知度は、0%だと報じていました。これは、忘れたのではなく、「お釈迦様のお誕生日」を知らないということですね。

ところで、二〇一五年四月八日の都心はどんな天気か覚えていますか。時ならぬ降雪となり、開花した桜に積もる雪が大きく報道されていました。同じ月の二八日、都心は夏日、関東各地で真夏日となるほど気温があがりました。ひと月の間に、降雪と夏日が巡ってくるのは、大変印象的な出来事なので、そのあと数日、この話題で語り合ったにもかかわらず、「人の噂も七十五日」、いやひと月も経つと忘れてしまうのが、私でした。

その時、その日のあり方まで左右する大きな出来事が起きてても、人間の記憶は、案外、散慢で、あっという間に忘れてしまうのでしょうか、それとも日本列島に住んでいる人びとの特性なんでしょうか。

雪も豪雪となれば大きな被害が出るように、雨も豪雨で災害になります。しかし、日本には「水に流す」ということわざがあります。四季の気候が明確に変わる日本列島は、季節の変化を愛でることができ一方、自然災害も頻発します。そのため、水害で生まれた悲しみ、辛さをいつまでも引きずるのでなく、新しく生活を立て直そうという意識が、「水に流す」という感覚を生んだのかもしれない。

忘れることは悲しみを和らげ、新たな生き方を生み出すものでしょうが、西洋文化のように、自然は征服するものという意識は生まれず、今までの体験が将来に中々、生かされないという側面もあります。日本では、自然災害だけでなく、人災である、戦争による被害や侮辱、原発事故による被害や格差などにも言えることではないかと考えました。

●線香花火の記憶

NHKの昼の人気番組だった「サラメシ」で、福岡県の線香花火の職人さんが紹介されました。「サラメシ」という番組自身は、「働く人のランチ」、つまり、サラリーマンのメシ(ごはん)を主役として紹介するものです。しかしながら、実際は、その人の仕事、職場、人間関係、さらにはそれを通しての人間観や人生論までが透けてくるようで、私にとって、見終わるとなんともいえないホーっとした気分になる番組です。

花火職人の筒井良太さんは、当時、日本で三社しかない国産線香花火の製造所を経営しています。同製造所のサイトによれば、線香花火の火薬には宮崎産の松煙しょうえんという時間をかけたもの、紙は福岡県八女市の手すきの和紙が使われ、さらにその和紙を草木染めで染色して、専門の職人の手によって一本一本丁寧に縫い上げられています。考えてみれば花火ですから、爆発をとまなう火薬が、原材料の一つとして使われています。

番組では、筒井さんご夫妻が、線香花火の魅力を語っていました。

「花火を点火する時、危ないから遠くに離れますが、線香花火だけは、風を遮るため、そして、その花火の瞬きを見つめるため、人と人の距離が近づくのです。」と言うのです。

それを聞きながら、爆発力の大きな打ち上げ花火は派手な印象が残りますが、不思議なことに、点火した時の風の流れ、昼の暑さを肌に残した人いきれ、周りですだく虫の声、じっと見つめる瞳の中に映る線香花火は、心に温かく優しい印象を残してくれるのだと思いました。

時には何かを破壊するほどの威力のある強い花火は外に向けて爆発し大きな火花を出しますが、か弱い線香花火は人の内側に向かってしっかりとした思い出を残しているように思いました。同じ、火薬を使った花火でも、その因縁の作り方によって、人の記憶に与える内容は随分違うのではないのでしょうか。

●仏の顔も三度？

お釈迦様は北インドの釈迦国の王子でした。当時、インドは、マガダ国とコーサラ国が勢力を争っていましたが、弱小の釈迦国は両国に挟まれ、つねに侵略の危機にありました。釈尊が出家したあと、コーサラ国の毘琉璃王⁽¹⁾は大軍を連れて釈迦国に責め滅ぼそうとしましたが、その時、釈尊は三度にわたって、軍隊の通る街道の枯れ木の下に端座たんざしていました。王は、何故、茂った葉の木でなく、枯れた木の下に坐るのかと尋ねると、「王よ、親族の陰は涼しい」という深い意味をこめて釈尊が返答をしたので、王は釈迦国を攻めるのを止めましたが、四度目は止めなかったと小部経典『譬喩経』に伝わります。

ここから、「仏の顔も三度」ということわざが生まれました。史実では、三度まで猛る心を留めただけで、四度目は止めることなく釈迦国の一族を滅ぼしたのは毘琉璃王です。しかし、現行のことわざの解釈は、仏(お釈迦)様のような温厚な方でも、非礼を許してくれるのは三度目までだという受け止めに全く変わっています。

実は、この話には深い因縁があります。毘琉璃王の父王⁽²⁾が若き日、釈迦族から妃を迎えたいと考え使者を送ります。しかし、断れば武力にもの言わせ攻めてくるだろうコーサラ国に王女を嫁がせるのを快く思わなかった釈迦族の王族⁽³⁾は、身分の低い女に生ませた娘の出生の秘密を隠して王女として嫁がせたのです。やがてコーサラ国王との間に王子が生まれ、その子が八歳の時、弓を学ぶため釈迦国に留学しますが、そこで自分は身分の低い娘が産んだ子であることから差別を受け、はじめて出生の秘密を知るわけです。王子は、自分が王になった時に釈迦国を滅ぼすことを誓い、父の死後、王位を継ぐと釈迦国に出兵しました。しかし、インドの故事の「遠征の時、僧にあつたら兵を退けよ」に従い、釈尊に会うことで三度まで兵を退けました。一方、釈尊もこのような釈迦国のかかえる因縁をさとって四度目は、坐ることを止めたため、軍によって故郷の人びとは虐殺されました。さらに後日談があり、毘琉璃王は兵たちと共に、七日後、川に遊行していたところで暴風雨に遭って命を落とし、宮殿は落雷のために炎上焼失したのでした。

歴史の事実を知ること、すなわち、暴力で妃を取ろうとしたこと、出生を偽って嫁がせたこと、しかも人を差別することを認めたこと、さらに怨みに怨みで報いたことで王自身も命を落としたこと、これらは、因縁によって物事は起こるということを教えるものです。

記憶は忘れることで癒しは生まれますが、道理の法則、因果の教えを身につけるとともに、忘れてはならない歴史を受け止め直す「智慧ある生き方」が恵まれます。戦後七〇年の談話をどのように受け止めるのかということも、仏教の智慧と別のことではありません。

(1) 毘琉璃王(Vidudabha、ヴィドゥーダバ、ビドゥーダバ、ヴィルューダカ、毘琉璃=ビルリ、琉璃・瑠璃=ルリ王など)

(2) 波斯匿王、釈迦成道の年に即位したという。マツリカー夫人(末利、勝鬘夫人)は第二妃とも、第一妃とも。王子がいたが、ジェータ太子(祇陀、祇多)とヴィドゥーダバ太子(ビドゥーダバ、毘琉璃、破瑠璃、のちの毘琉璃王)が有名。祇陀太子は自身が所有する林園をスダッタ長者(須達多)に譲って祇園精舎が建てられたことで有名。毘琉璃王は、召使(下婢)のマツリカーが産んだ娘の子。

(3) 釈迦族のマハーナーマン(摩訶摩男、大臣ともいわれる)が「波斯匿王は暴悪だから、もし怒らばわが国を滅ぼすだろう」と思い、大臣自身と下女との間に生ませた娘が容姿端麗だったので、その下女の娘を自分の子であると偽り、沐浴させて身なりを整えさせて立派な車に載せて波斯匿王のもとに嫁入りさせた。

仏教が、迷いに基づく行為が苦悩を作ることを強く説く教えであること、それを超えるのは、自他一如の深い実感、「さとり」、信心であることが知られます。

「経教は鏡のごとし。
読み尋ぬれば智慧を開発す」『観無量寿経疏』

「お経の教えは、あるがままに私を映す鏡のような働きを持ちます。教えを読み学べば、その鏡に出遇ったものに、自分を知る、仏の智慧が開きます。」

と明かされます。

合掌

万行寺第十八世住職 釋靜芳(本多 靜芳)

※ご縁のあったあなた！ 第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？ お待ちしてます(会費はいずれも資料・茶菓代として千円です)。

「ナムの会」は一月と十二月は休会します。